日医報告

第53回 社会保険指導者講習会
主題「がん診療 update」

札幌医科大学医学部泌尿器科学講座
講　師　北村　寛（きたむら　ひろし）

北海道大学大学院医学研究科内科学講座腫瘍内科学分野
医　員　天野　虎次（あまの　とらじ）

旭川医科大学病院　呼吸器センター
医　員　奥村　俊介（おくむら　しゅんすけ）

平成21年8月20日（木）・21日（金）の両日、日本医師会館大講堂において第53回社会保険指導者講習会（主題「がん診療 update」）が開催された。

本講習会は、医学・医術のたえざる進歩に対応して常にその基礎的知識を体系的に吸収し、社会保険診療内容の向上を図ることを目的に、日本医師会と厚生労働省が共催で開催している。当日は医師会はじめ、厚生局、支払基金、国保連合会関係者等延べ628名が参加した。

当会からは担当役員が参加するとともに、３大学より推薦いただいた北村寛氏(札幌医科大学医学部泌尿器科学講座講師)、天野虎次氏（北海道大学大学院医学研究科内科学講座腫瘍内科学分野医員)、奥村俊介氏（旭川医科大学病院　呼吸器センター医員）の3氏に参加いただいた。

主題の講演内容については、日本医師会雑誌第138巻・特別号（1）生涯教育シリーズ76「がん診療 update」に掲載されているが、特に会員に伝達したい事項について、3氏より執筆いただいたので、ここに報告する。

－医療保険部－

前立腺がん診療のupdate

札幌医科大学医学部泌尿器科学講座
講　師　北村　寛

はじめに

前立腺がんは高齢化や食習慣の変化などにより、わが国において増加傾向にある。2003年の男性における罹患率は胃、大腸（結腸および直腸)、肺に次いで第四位であるが、2020年には肺がんに次いで第二位になると予測されている。したがって泌尿器科医以外の実地診療においても、前立腺がん知識の重要性が増してくるものと推測される。

本稿では第53回社会保険指導者講習会における東京慈恵会医科大学泌尿器科・頴川晋教授の講演内容に基づき、前立腺がん診療のトピックを概説する。

臨床的重要性

前立腺がんには「臨床的に重要でないがん」という概念がある。前立腺がんの典型的な経過を**図1**に示す。がんが発生してから血清PSA (Prostate Specific Antigen; 前立腺特異抗原)値が上昇して臨床的に問題となるまで13.6年から18.6年かかるとされる。この間前立腺がんはほとんど進展を認めない。しかし、ある患者が比較的低いPSA値の段階で前立腺がんの診断を受けた場合、がんが発生して間もないのか、発生してから数年経過しているがまだ経過を見ていられるのか、あるいは発生してから15年以上経過していて、まもなく進展が始まるのか、いずれかを診断することは困難である。

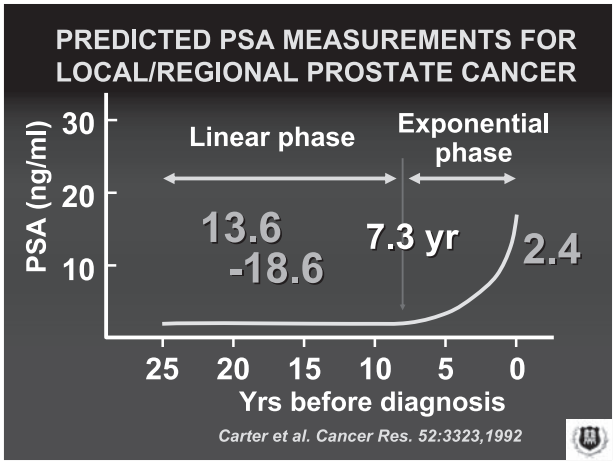

図1　前立腺がんの経過とPSAの推移

また前立腺がんは高齢者に認められるがんなので、発見された年齢によって扱い方が異なる。**図2**のX軸のようにがんが進行するとした場合、50歳でがんが発見された患者は28.4年の余命が期待されるために、かなりの進行が予測される。一方80歳で同様のがんが発見された場合、余命は6.9年なのでさほど進行しないまま他因死する可能性が高く、積極的な治療は必要ないという判断になる。したがって同じ前立腺がんでも発見年齢で臨床的なインパクトが異な